リフォームをめぐる人々 28

月1回掲載

三井のリフォーム 住生活研究所 所長　西田恭子

介護リフォーム

バリアフリーリフォームの事例を整理してみると、元気なうちのバリアフリーと在宅介護を見据えたバリアフリーリフォームがある。我が家でいつまでも元気に暮らせるようにするリフォームと、介護を前提にするリフォームだ。

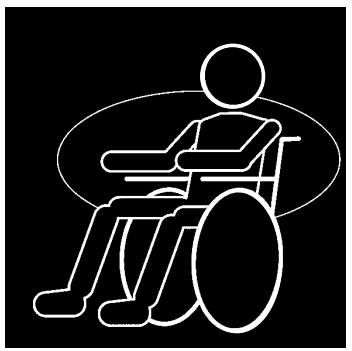
在宅介護を推進する政府の方針を考えると、そのための家の準備が必要だが、多くの方は家族に迷惑はかけたくない、または、人に世話されるなんてまっぴらだ、と思っている。

長いあいだ老人病院の婦長をしていた方が、リタイアした。その後の生活をお聞きすると、「寝たきりにならないのが、今の私の課題です！　そのためにスポーツジムに行き、週四日プールに入り、水の中を歩いている」と言っていた。毎日通っていた職場だが、断固としてその老人病院には行かないぞ、という決心である。

また、デイケアサービスのボランティアを一〇年している方が、「老人ホームには行きません。みんながいるようで、あんなに孤独なところはありませんから」と語っていた。

どちらも実体験から発せられた言葉であるだけに、重く心にのしかかってきた。

施設にも、病院にも行きたくないとなると、何とか最後までわが家で暮らす工夫が必要になってくる。家のバリアフリー化だけでは心もとない。家族の支えは望めるのか？　地域の支援がどうなっているのか？　いろいろ課題はある。



子どもが親の近くで住むことのメリットとして、子どもの面倒を見てもらいたいという育孫支援が注目を浴びているが、育孫と介護はセットである。少子化の時代に、どちらの親を誰がみるのかを決めるのは、兄弟姉妹間でも難しい問題だ。親とどの子が、どんな距離感で住むのか。そのためには子どもではなく、親が住む家を変えることも珍しくなくなった。

また、寝たきりの両親をかかえた一家が、住み慣れた家を売却し、福祉に手厚い行政の地域に引っ越して行ったこともあった。

バリアフリーリフォームとは、今のわが家をどうするかを考える前に、どこを最終章の住まいとするかを決めなければならないのである。

中古物件流通の活性化が、移り住むことをたやすくしている。中古を買ってバリアフリーリフォームをする事例が増えてきているのも、在宅介護への準備としての意味合いが考えられる。

「ぴんぴんころり」という言葉がある。毎日ぴんぴん元気に過ごしていて、死ぬ時はころっとという言葉だが、なかなか願望どおりにはいかないものだ。

どうやら避けては通れない老後への備えを、地域の福祉行政と地縁血縁と、そして家のバリアフリー化を複合して考える必要がありそうだ。

西田恭子氏のプロフィール＝一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。